唐光啓元年書寫沙州・伊州地志殘卷に就いて

一　緒　言

古書の湮滅を悲しむのは今更のことではあるが、唐代に選述された幾つもの地志が殆んど今日に傳はらず、僅かに元和郡縣圖志の本文の大部分だけがその面影を留めて居るに過ぎないのは、悲慘の極と言はねばならぬ。宋の初期に閉鎖された鳴沙の石室から沙州地方に關する地志だけでも數種發見されたことは、かゝる事情の間に在つて特筆すべきことの一つである。余の知るところにして誤らなければ、石室から出た書中、今日までに報告せられたこの地方の地志には四種類がある。第一はスタイン氏が獲て現に大英博物館に藏せらるゝ燉煌錄①で、一九一四年ヂャイルス氏によつて發表され、その當時亞米利加に在つた胡適氏の論評を經て、更に一九一五年ヂャイルス氏の新研究となつて現はれた。第二はペリオ氏の獲た沙州都督府圖經で、氏は逸早く一九〇八年にこれを段國②の沙州記であらうとして傳へ、ついで一九〇九年（宣統元年）羅振玉氏③が沙州志と題して刊行し、一九一三年（民國二年）同氏が沙州圖經と改題して印行し、更に一九一六年にペリオ氏④が沙州都督府圖經の名を與へたものである。第三はペリオ氏の獲た五季漢の乾祐二年に選述されたもので、余が沙州地志殘卷として燉煌遺書活字本第一集に收錄したところである。第四は卽ちこゝに印出するもので、スタイン氏によつて獲られ、今大英博物館に⑤スタイン蒐集漢文書 936

唐光啓元年書寫沙州・伊州地志殘卷に就いて